

| | |
|-----------|---|
| 氏 名 | 梅 香 央 里 |
| 学 位 の 種 類 | 博士（文学） |
| 学位記の番号 | 甲第 170 号 |
| 学位授与年月日 | 2014（平成 26）年 3 月 20 日 |
| 学位授与の条件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 |
| 学位論文題目 | 近世におけるフッガー家のネットワーク |
| 論文審査委員 | —帝国（Adel）と都市（Patriziat）身分のはざまで 主査 北村暁夫 （史学専攻教授） 副査 加藤玄 （史学専攻准教授） 副査 佐藤和哉 （英文学専攻教授） 副査 森田安一 （本学名誉教授） 副査 踊共二 （武蔵大学教授） |

論 文 の 内 容 の 要 旨

論文概要：

フッガー家は、南ドイツの帝国都市アウクスブルクを本拠地として活躍した、当時、最大の商人であり銀行家としても知られる。ドイツにおける伝統的なフッガー研究は、主に経済史研究者により行われてきた。それらの研究はいずれも、研究発表当時の時代背景に合わせてフッガー家の並はずれた経済的上昇のみを強調し、1560 年以後（アントーン・フッガー逝去後）のフッガー家の歴史には無関心であった。16 世紀における「フッガー家の時代」は、最盛期の「富豪」ヤーコプ・フッガーとその後継者、アントーンの時代とともに終わったと言われてきたのである。フッガー家は、現在もなお存続しており、一族の家系が明確に分かれ、さらに繁栄していくのはアントーンの子孫の世代からである。

フッガー家に関する 16 世紀後半から三十年戦争勃発に至るまでの研究は、長く欠落したままであった。しかし、21 世紀に入り、フッガー研究は新たに社会史的視点、特にコミュニケーション・メディア史の分野でも行われるようになってきている。フッガー研究の新たな視点は、アウクスブルクの指導層の研究における、ラインハルトの「社会の密接な関

連 (Soziale Verflechtung)」の構想とも結び付いている。ラインハルトは、都市階層について、租税台帳の分析による財産額の判断基準 (財産額により、上、中、下の 3 階層から成るとする形式=Dreischichtenmodell) のみで、中世および近世の社会構造を記述するには不十分であると指摘した。都市の指導層たちは、その構成員の間の実際の結合関係を通して形成され、ネットワークの密度、結合関係の多様性、生活形態、ならびに社会的名声は、近世都市社会の階層を考えていく上で重要な鍵となるとラインハルトは述べている。

フッガー家の本拠地アウクスブルクは、古代ローマ帝国の時代より、特に北イタリアとの交易が盛んに行われ、東方貿易による大規模な商業および手工業活動により繁栄していたことが広く一般に知られている。16 世紀には、アウクスブルクは神聖ローマ帝国における最も大きな帝国都市の一つとなり、「コミュニケーション」(活版印刷、人文主義、情報伝達) の中心地となっていた。時の皇帝マクシミリアン 1 世は、フッガー邸に滞在することも多く、このために 1500 年頃よりアウクスブルクに郵便 (Post) が置かれたともいわれている。1490 年、アウクスブルクを含み、インスブルックからブリュッセル近郊のメヒェルン間を結ぶ郵便路線を開設したのはタクシス家のフランツであり、タクシス家はフッガー一家との個人的な結びつきをも有していた。初期郵便制度が実現され最盛期を迎えたのは、アントーン・フッガーの後の世代、「帝国郵便 (Reichspost) の代父」と呼ばれているハンス・フッガー (アントーンの次男) の時代である。2003 年に刊行された史料「ハンス・フッガーの書簡」、および現在編纂中の「フッガー通信 (Fuggerzeitungen)」を用いた最新の研究成果により、フッガー家は商業活動とならび、皇帝、帝国諸侯への貸付を行い、経済的な結びつきのみならず、緊密な個人的な結びつきをもまた保持していたことが明らかになりつつある。フッガーは、彼らの単なる出資者にとどまらず、情報の仲介・提供者として活動しており、皇帝も諸侯も、フッガーが質の高い情報を手中にしていることを知っていたという。フッガー家のような大商人は、自身の商業活動を達成するために、様々な情報をヨーロッパ中から収集していたのみならず、定期的に情報を転送していた。

以上のような研究成果をふまえ、本稿においては、「近世におけるフッガー家のネットワーク」について考察を行った。フッガー家は、自身の幅広い (ヨーロッパ中のみならず、中南米とアジアも含めた) ネットワークを築くために、いかにして、都市およびヨーロッパにおける社会的立場を確立させてきたのであろうか。この考察には、従来の経済史的視点のみでは不十分であり、フッガー家と都市、および帝国との諸関係を当時の時代背景と合わせて総合的に検討していく必要がある。そこで、ラインハルトの「社会の密接な関連」

の概念を用いて、第1部では宗教改革期のアウクスブルクにおけるフッガー家と都市指導層の結び付きについて、第2部では「情報」を核とした、帝国におけるフッガー家のネットワークについて分析、考察を行った。都市と帝国のはざままで活動したフッガー家の新たな像を提示している。

また、フッガー家の研究史上、「フッガー家の時代」（ヤーコプとアントーン）とアントーンの後世代とを連続して検討したものは極めて少ないことから、アントーンの後世代へと続くフッガー家の継続性を明確にしている。主に、16世紀後半を考察の対象とするが、第1部は中世後期から16世紀中葉、第2部は16世紀後半以降の時代区分とした。

第1部「中近世アウクスブルクにおけるフッガー家と都市指導層」においては、はじめに（第1章）、アウクスブルクの統治構造について分析した。フッガー家が市政に関与するようになるのは1548年以降のことであるが、複雑な市政の仕組みを理解するために、1368年のツンフト市政樹立まで遡っている。主な史料として、ラインハルト編纂によるプロソポグラフィ『16世紀のアウクスブルクのエリートたち』（1996年）を用いた。プロソポグラフィには、1500年から1620年の間に、アウクスブルクの経済的・政治的指導層に属していた1545名のデータ（出生年月日、血縁関係、経済活動、都市の官職、所有地および納税額など）が記されている。アウクスブルクの指導層に属する集団は、都市貴族、メーラー、商人ツンフトの構成員（*Kaufleutezunft*）、商人の酒房団体の構成員（*Kaufleutestube*）、ならびにその他の卸売商人（主に塩運送業者ツンフト、小売商ツンフトの構成員）から形成されていた。ツンフト市政について分析するとともに、都市においてライバル関係にあった市政外の組織である二つの酒房団体（*Herren-, Kaufleutestubengesellschaft*）から都市指導層形成過程を検討した。

第1部第2章においては、アウクスブルクの年代記をいくつか用いて、同時代人によるフッガー家に対する認識を分析し、都市指導層との関係を踏まえながら、アウクスブルクにおける宗教改革の諸問題に対するフッガー家の立場を考察した。アウクスブルクは宗教改革史の重要な舞台でもあった。宗教改革における主要な出来事は、フッガー家の全盛期時代と一致している。フッガー家は宗教改革期に都市内でどのような地位にあったのか、宗教改革はフッガー家にいかなる影響をもたらしたのかについて検討を加えた。

フッガー家は元来、生粋の都市貴族（*Patriziat*）ではなく、農民出身の織布工としてアウクスブルクに移住し、身分的上昇を遂げた一族であった。1368年から180年間続いたツンフト統治体制下のフッガー家は、政治的には明らかに議席を有しておらず、1548年のカ

ール5世による市政改革後、ようやく高い官職に就くようになった。しかし、同時代の年代記において、フッガー家はどのアウクスブルクの都市指導層よりも多く言及されており、一族の富と皇帝・諸侯・ローマ教皇庁との親しい結び付きが描かれていた。フッガー家は、遠隔地貿易、および鉱山業で成功をおさめると、都市での身分的上昇よりも先に、皇帝から貴族（Adel）身分を与えられた。都市貴族に昇格するのは、貴族身分を得てから27年後（1538年）のことであった。名実ともに全ての面での第一人者となるために、フッガーは都市の教会、修道院、その他、当該施設の所有する神学院等の学校、福祉施設に、アウクスブルク市民の他の誰よりも多くの寄進を行った。特に、ヤーコプ・フッガーにより寄進された「Fuggerei（フッゲライ）」をもって、アウクスブルクにおける同家の立場を確立させることができたといえよう。

第2部「近世ヨーロッパにおけるフッガー家の情報ネットワーク」において、まず、第1章では、アントーン・フッガー逝去後の16世紀後半におけるフッガー家とその商社状況について、およびハンス・フッガーとその時代について言及した。

第2部第2章においては、近世ヨーロッパにおけるコミュニケーションシステムの基礎を築いたとされる、フッガー家とタクシス家の関係について考察するとともに、ハンス・フッガーを中心として、商社員（主に支店長）と業務支配人（フッガー）をめぐるフッガー家の本店と在外支店間、特に、アウクスブルクとスペイン間におけるコミュニケーションの実態を解明した。ハンス・フッガーのフッガー家の商社内・外における役割についても検討し、「コミュニケーションの才能のある人物」（Karnehm）としての新たな像を提示した。

都市における自身の立場を確立させたフッガー家は、その後もアウクスブルクを本拠地として、帝国政治へと関わるようになっていった。第2部第3章から第5章においては、「ハンス・フッガーの書簡」より、アウクスブルクの改暦紛争における宗派对立、スペイン支配下におけるネーデルラントの蜂起に関する諸問題、ならびにケルン戦争に対する帝国政策の三つの事例を取り上げ、都市のみならず、帝国におけるフッガー家の情報ネットワークを分析した。

16世紀後半は宗派闘争の渦中にあり、フッガー家は、アウクスブルクのイエズス会を援助するなど、都市のカトリックの宗派化に貢献するとともに、一族のカトリック信仰を確立した。フッガー家は、経済活動のみならず、アウクスブルク都市内においても重要な立場に置かれることとなった。特に、ハンス・フッガーの兄マルクスは、都市統治機関にお

ける最高位の都市管理人（Stadtpfleger）として、改暦問題に対処していた。

1583年に生じたグレゴリウス暦への改暦紛争は、アウクスブルクにおける宗派对立とされている。紛争の発端は、カトリック側（都市指導層）が新たなグレゴリウス暦の採用を主張したのに対し、福音主義の人びと（商人、一般市民）は従来のユリウス暦を遵守したことにあつた。その際、フッガー家、およびアウクスブルクの指導層は、改暦紛争をどのように捉えていたのか、また、同家は、市参事会にいかなる影響を及ぼし得たのか。これらの点を考察するとともに、従来の研究において、宗派的に比較的寛容な都市であったとされているアウクスブルクの宗派状況を追究した。

ケルン戦争（1583-89年）は、大司教区ケルンをめぐり、プロテスタントへ改宗したゲーブハルト・トルフゼス・フォン・ヴァルトブルクとカトリックのバイエルン公エルンストのあいだに起こった対立である。宗派闘争の渦中にある1580年代において、帝国政策的に最も高い議論を呼んだ事件であった。ネーデルラントの蜂起、およびケルン戦争は、三十年戦争への一行程としても捉えられている。ケルン戦争については、「ハンスの書簡」と「フッガー通信」を比較しており、さらに、同時代人がどのようにケルン戦争を評価したのか、例えば、戦争勃発後の情報伝達はいかなるものであったのか、そもそも戦争は回避できなかったのかについて、その他の同時代の史料とも比較検討を行った。

これらの考察により、フッガー家のカトリック擁護の立場が明確になり、同家が宗派闘争の混乱した時代を乗り越えた様子が明らかとなった。一方において、フッガー家の情報ネットワークは、宗派の境界を越えて築かれており、ルター派のヴェルテンベルク公ルートヴィヒ、およびノイブルク宮中伯などの他、ルター派の「親友」（ヨハン・トナー、ハンス・ホノルト、フィリップ・およびハンス・ジークムント・シュタムラー兄弟等）もいた。さらには、フッガー家の一族の中にも福音主義への改宗者がいたほか、ハンス・フッガーの妻エリーザベトも、結婚した当初は福音主義派であった。フッガー家の宗派の境界を越えた結び付きは、カトリックとプロテスタントの二大勢力が人的交流、および経済関係を断ち切つてはいなかったことを証明している。宗派闘争の時期を乗り越えたフッガー家の影響力は大きく、フッガー家とコミュニケーションの研究は、近世ヨーロッパ社会の経済的、政治的な成長過程をより詳細に把握できることになるであろう。

第2部第6章においては、フッガー家と王侯貴族との関係を、まず、フッガー家と、宮廷および帝国の役人として従事したモントフォルト家（土地所有貴族）の結び付きについて、最後に、フッガー家とバイエルン公家の結合関係についてさらなる検討を加えた。第

3章から第5章における「ハンスの書簡」の分析において、モントフォルト家およびバイエルン公家と、フッガー家との結び付きが頻繁に見られ、モントフォルトは、フッガーにとって情報の供給者として際立った地位にあった。両者とフッガーの利害関係について考察した。

ハンス・フッガーの時代は、ハプスブルク家の「債権者」としてのみならず、「情報提供者」として、さらには、フッガー家とモントフォルト家、およびバイエルン公家との関係で明らかとなった「庇護者」、ならびに「仲介者」という確固たる地位を築き、一族の立場をさらに上昇させたフッガー家の新たな方向付けの時期であったといえる。従来の経済史研究者によって指摘されてきたような「没落」はしていない。

本稿により、中世末期から16世紀後半におけるフッガー家の動向、立場、ならびに同家とそのネットワークが社会に与えた影響を明らかにすることができよう。

論文審査結果の要旨

論文の内容の要旨

フッガー家は、15世紀から17世紀にかけて帝国都市アウクスブルクを本拠地として活躍した、この時期最大の商人、銀行家である。欧米および日本における伝統的なフッガー研究は主に経済史研究者によって担われ、主たる関心は16世紀前半にいたるフッガー家の経済的上昇にもっぱら寄せられてきた。これに対して、16世紀後半以降の同家に関する研究は長らく欠如してきたが、2000年以降、欧米では社会史的な視点から同家を取り巻く社会的結合関係や人的ネットワークに着目する研究が登場するようになった。本論文はこうした欧米の新たな研究動向に示唆を得ながら、近年刊行された「ハンス・フッガーの書簡」や編纂中の「フッガー通信」の解説を通じて、フッガー家が構築した人的ネットワークを解明し、そのネットワークから収集した情報に依拠して行われた彼らの経済活動、政治活動を明らかにすることで、フッガー家および同時代のコミュニケーションのあり方に新たな視座を提示することを目指したものである。

本章の章構成は以下のとおりである。

第1部 中近世アウクスブルクにおけるフッガー家と都市指導層

第1章 アウクスブルクの統治構造（1548年まで）

第2章 「フッガー家の時代」におけるアウクスブルクとフッガー家

第2部 近世ヨーロッパにおけるフッガー家の情報ネットワーク

第1章 いわゆる「フッガー家の時代」の後の世代へ

第2章 フッガー家とコミュニケーションシステム

第3章 アウクスブルクにおけるフッガー家と情報ネットワーク

第4章 帝国におけるフッガー家の情報ネットワーク

第5章 ケルン戦争をめぐるフッガー家の情報ネットワーク

第6章 フッガー家と王侯貴族のネットワーク

次に、本論の内容について章ごとに略述する。

第1部は、フッガー家の本拠地であるアウクスブルクの政治・社会構造とその中におけるフッガー家の位置を明らかにした。

第1章では、14世紀にツンフト市政が樹立されて以降のアウクスブルク市政の歴史を概観したのちに、プロソポグラフィーの方法を用いて16世紀のアウクスブルクにおける経済的・政治的指導層の実像を分析した。その結果、都市の指導層に属する集団は、都市貴族、メーカーと呼ばれる新興富裕層、商人ツンフトの構成員、商人の首謀団体の構成員、ならびにその他の卸売商人（主として塩運送業者ツンフト、小売商ツンフトの構成員）から構成されていたこと、また都市における市政外の組織である二つの酒房団体からフッガー家を含む都市指導層が形成されていったことを明らかにした。

第2章では、アウクスブルクの年代記を用いて同時代人によるフッガー家に対する認識を分析し、都市指導層との関係を踏まえながら、同市における宗教改革の諸問題に対するフッガー家の立場を考察した。この都市は宗教改革史の重要な舞台の一つであり、宗教改革における主要な出来事はフッガー家の全盛期と一致している。当該時期の年代記の分析により、フッガー家は皇帝・諸侯・ローマ教皇庁ときわめて親しい関係にあったこと、遠隔地貿易および鉱山業で成功を収めると、都市での身分的上昇よりも先に、皇帝から貴族（Adel）身分を与えられたこと、同家は都市の教会や修道院などに対して多くの寄進を行い、とりわけヤーコプ・フッガーが寄進した「フッゲライ」により同家はアウクスブルクにおいて確固たる立場を築くこととなったことが明らかとなった。

第2部は、フッガー家が国外に置いた支店のネットワークを分析したうえで、アウクスブルクで起きた改暦をめぐる宗派对立、ネーデルラント蜂起やケルン戦争といった諸事件を通して、都市内部および帝国におけるフッガー家の情報ネットワークを分析した。

第 1 章では、フッガー家全盛期の当主アントーン没後の 16 世紀後半におけるフッガー家と同家が経営する商社の経営状況を分析したうえで、この時期のフッガー家を率いたハンスの生涯とその時代を概観した。

第 2 章では、近世ヨーロッパにおけるコミュニケーション・システムの基礎を築いたとされるフッガー家とタクシス家の関係について考察したうえで、フッガー家とその在外支店との間で展開されたコミュニケーションの実態について分析した。フッガー家はアントーンの時代に 80 以上の都市に在外支店を設けていたが、とりわけアウクスブルクからの距離の遠いスペインにおいては支店長が独断専行でスペイン王室との取引を行う状況に悩まされていた。この状況に対し、ハンス・フッガーは視察官制度を導入することによりアウクスブルクとスペイン支店との間の規則的なコミュニケーションを回復させることに成功した。こうした経緯の分析を通じて、ハンス・フッガーのコミュニケーション能力を高く評価する近年の研究動向を支持する見解を提示し、さらに新たな具体的知見を提出した。

第 3 章では、宗教改革期のアウクスブルクにおける宗派闘争を象徴する事件であった改暦紛争を分析することにより、アウクスブルク内外におけるフッガー家の情報ネットワークの実態を解明した。16 世紀後半の宗派闘争の渦中において、フッガー家はアウクスブルクのイエズス会を支援するなど、都市のカトリック宗派化に貢献するとともに、一族のカトリック信仰を確立した。1583 年に生じたグレゴリウス暦への改暦をめぐる紛争は、カトリック側（都市指導層）が新暦の採用を主張したのに対し、福音主義の人びと（商人、一般市民）が従来のユリウス暦を順守したことに端を発した。この紛争をめぐってハンス・フッガーが帝国内のプラハやシュパイアーといった都市の有力者と交わした書簡を分析することにより、彼がカトリック側に対する皇帝や諸侯の支援を得るために自らの持つ情報ネットワークを最大限に活用したことや、基本的にはカトリックの利益を図って行動しながらも、フッガー家の情報ネットワークが宗派の境界を超えて築かれており、対立が決定的な破局に至らないように交渉を継続する宗派共存的な姿勢を同家が維持していたことを明らかにした。

第 4 章では、1568 年にはじまるネーデルラントにおけるスペイン支配に抗する蜂起を素材として、ネーデルラント情勢をめぐってハンス・フッガーがさまざまな人々と交わした 400 通近くの書簡を分析することにより、フッガー家の情報ネットワークの一端を解明することを目指した。分析の結果、ハンス・フッガーは自身の情報ネットワークを武器として、収集した情報を政治的な有力者に提供し、さらにカトリック寄りの立場からコメントを加

えることにより、支配者たちの政治動向に影響を与えようとしたこと、フッガー家の情報ネットワークにおいてバイエルン公およびスペイン王室との緊密な関係が重要な役割を果たしたことを明らかにした。

第 5 章では、1555 年の「アウクスブルクの宗教平和」後に起こった最初の大きな宗派政治闘争であるケルン戦争（1583 年～1589 年）を素材として、フッガー家の情報ネットワークに関してさらなる分析を行った。ケルン戦争はケルンの大司教選出をめぐる、プロテスタント改宗者とカトリック勢力との間で起きた紛争であり、宗派闘争の渦中にある 1580 年代において帝国政策的に最も大きな議論を呼んだ出来事であった。ハンス・フッガーがこの時期にプラハやローマと交わした書簡の分析を通じ、フッガー家の情報ネットワークがフッガー家の商社の支店網と一致しており、支店長をはじめとする従業員が通信員として重要な役割を果たしていたこと、本店と支店との間や支店同士の間で交わされる情報をめぐって、フッガー家の人びとが情報や通信員の信頼性を絶えず確認しあっていたことを明らかにした。

第 6 章では、フッガー家とバイエルン公家および宮廷役人を輩出する家系であった土地所有貴族のモントフォルト家との人的関係を分析することで、フッガー家と王侯貴族がいかなるネットワークによって結ばれていたかを解明することを目指した。その結果、ハンス・フッガーが当主を務めた時代に、フッガー家はこれら王侯貴族に対して多額の貸し付けを行っていただけでなく、フッガー家の知己の人びとと王侯貴族たちとの仲介役やメッセンジャーとしての役割を果たしており、そうした役割を果たすことで帝国内におけるフッガー家の位置を不動のものとしていったことを明らかにした。

以上の諸章の考察により、フッガー家は経済的繁栄のピークを迎えた 16 世紀半ば以降も、自らが築き上げた支店網を通じてさまざまな情報を収集し、得られた情報を資源として都市アウクスブルクのみならず帝国内で確固たる地位を維持し続けたこと、宗教改革期の宗派对立のなかでカトリック寄りの姿勢を明確にしてカトリックの利益を図るために腐心する一方で、宗派の境界を超えた人的関係を維持することで宗派共存に一定の貢献をしたことを明らかにし、16 世紀後半がフッガー家の没落の時代であるというこれまでの通説が成立しないという結論を得た。

論文審査の要旨と結果

2013年10月26日に公開審査会が開催され、審査員から本論文を高く評価する意見が寄せられた。それを要約すると、以下の三点にまとめられる。

日本におけるフッガー研究は、戦後間もなく経済史的観点から開始された。だが、いわゆる大塚史学の強い影響のもとに行われた戦後の経済史研究において、遠隔地貿易を担う商人であり概ねカトリックの擁護者であったフッガー家はいずれ没落することを運命づけられた存在として描かれた。そのため、一時的に関心を集めたものの、その後の研究史において忘却されることになった。本論文は、長らく等閑視されてきたフッガー家研究を社会史・文化史的な視点から再検討することにより、新たなフッガー家像を提示しようとするものである。この点が本論文の第一の特長であり、研究史において画期的な点である。

第二に、本論文は、宗教改革・宗派対立・ネーデルラント独立といったヨーロッパ近世史における重要な出来事・事象についてフッガー家という視点を通して見ることにより、こうした事象に対する理解をさらに深めることに貢献している。たとえば、宗教改革期におけるカトリックとプロテスタントとの関係については、従来のような対立一辺倒ではない柔軟なあり方が近年提示され、宗派共存体制といった概念で論じられるようになっていく。本論文で扱われているフッガー家の人びとの宗教改革に対する態度も、宗派共存的な視点を補強するものとして機能している。

第三に、ネットワークという概念を導入し、活版印刷の登場とともに生じたコミュニケーション革命の時代におけるコミュニケーション、情報の実態を明らかにするという斬新な分析手法を用いた点が評価できる。

以上のように本論文に対する評価が出される一方で、審査員からはさまざまな批判も提出された。まず、本論文は先行研究の成果を過不足なく吸収し、広範な史料に基づいて丹念な実証がなされていると評価できる一方で、欧米なかんずくドイツにおける近年の研究に対してそれほど論争的でなく、自己の独創的な歴史像を提示するという点で若干物足りなさを感じるという批判が出された。また、コミュニケーションやネットワークという基本概念について、ある程度の説明がなされていて一定の理解はできるものの、なお洗練されるべきではないかという意見が出された。さらに、書簡の読み方として、レトリックや紋切型に対してもう少し配慮すべきではないかという批判や、アウクスブルクという都市の特殊性をもっと強く意識して叙述すべきではないかといった意見も出された。文章は全体に明晰であるが、さらなるブラッシュアップが必要であるとの意見もあった。

これら様々な問題はあるものの、審査員の評価としては、そうした問題の大半は今後の課題として検討すべきものであり、本論文が長らく空白状態にあったフッガー研究に新たな視点と成果をもたらしたことは疑いなく、日本の西洋史研究に対して大きな貢献をなしているものであるということで一致した。以上の審査結果により、本審査委員会は本論文が博士論文としての水準を十分に備えており、博士（文学）の学位授与に値すると判断し、本研究科委員会に報告する。

以上

上記の判定結果、相違ありません。

2013 年 11 月 11 日